

第Ⅲ部第六章

尼崎の現代

第一節（入門編）

『尼崎市史』にみる
尼崎の現代



南方から尼崎市を望む、昭和四二年撮影

一、『尼崎の戦後史』

刊行の経緯 『尼崎市史』の現代通史編は、『尼崎の戦後史』（以下『戦後史』と略す）として昭和四四年（一九六九）に刊行され、昭和二〇年代から三〇年代後半までを叙述しています。当初は近代とともに山崎隆三氏が執筆する予定でしたが、いまだ日本近現代史の通史的叙述や尼崎地域での研究蓄積が乏しく、刊行計画どおり単独執筆することが困難であると判断された結果、現代の執筆者として師岡佑行氏が追加選任され、別冊として刊行されることになりました。

なお『戦後史』に対応する史料編は、別編第一二巻として編集され、昭和六一年に刊行されました。

叙述の特徴 『戦後史』は、同じく通史編を構成する市史第一―三巻とはかなり叙述スタイルが異なっています。筆者自身が尼崎市に在住し、体験した時代を記述しているので、戦後尼崎の地域社会を構成するさまざまな分野・業界・団体・個人の動向、ときには裏面史にまで記述が及んでおり、筆致は軽妙・平易です。

その一方で、日本史及び地方史の分野で現代史研究がいまだ進んでおらず、尼崎地域の現代史に関する一次史料の調査・収集も進ちよくしていないという時代的制約から、歴史研究の蓄積に立った分析的叙述を第一―三巻のように行なうことは困難でした。新聞史料に多く依拠せざるを得ず、その叙述はある意味ジャーナリスティックです。研究の蓄積に立った多面的かつ実証的な歴史評価が、必ずしも十分行なわれているとはいえない側面がありました。本書が通史編本編ではなく別冊とされたのは、こういった点が編集計画段階にお

いてすでに意識されていたからにほかなりません。以下、節を追って叙述内容の特徴を解説します。

第一節・第二節―敗戦直後の状況― 第一節「敗戦直後の市民生活と尼崎市政」は、昭和天皇が「終戦の詔書」を朗読する玉音放送の場面から始まります。動揺する学校教員、軍の命令により三日間兵事書類を燃やし続ける市役所、多くの警官が辞職を申し出る警察署といったエピソードの紹介に続いて、戦災、食糧危機、壕舎生活、インフルなど市民生活を直撃する生活難、対応する市の動向、復興計画などが記されます。

この時代を象徴する闇市と商店街復興、これも重要なできごとである園田村合併に頁数が割かれます。

第二節「敗戦後の市政界・労働運動・産業」は、昭和五年の大政翼賛会発足と同時に消滅した政党の復活、戦争協力者の公職追放による八木林作市長はじめ議員・市吏員・町内会長などの追放、労働組合の復活と左右両派の地域組織結成、昭和二年の二・一ストに向けた政治・経済闘争、尼崎工業会の発足、商工業の復興と農地改革の実施状況などを解説します。

戦後尼崎の各分野の復興、とくに政党や労働運動の再生に頁を割き、いきいきと描き出しています。

第三節・第四節―戦後民主化政策― 第三節「苦難のなかの民主化政策」は、公選初代の六島誠之助市長の当選、国政・地方選挙での革新系の議席獲得、地方自主財源確保や六三制実施による新制中学・高校設置など山積する行政課題と困難な市政運営を解説しています。昭和三年の市警察発足と警察長選任をめぐる対立、市警幹部と密輸業者の癒着に始まる尼崎市警察問題については、とくにくわしく論述しています。

第四節「民主化の後退と労働運動の激化」は、東西

対立顕在化のなか、日本を反共の防波堤と位置付ける米国の対日政策転換、未制定に終わった市公安条例や占領軍の意を受けた県による朝鮮人学校閉鎖などの治安問題、これも占領軍の経済九原則指令による緊縮財政と不況、昭和二四年の尼崎地区全労働組合協議会（全労協）結成などを解説します。日雇労働者による尼崎自由労働者組合の結成と賃上げなどの要求、この時期の不況・金融引き締め策による企業人員整理と労働争議の頻発、とりわけ尼崎の経営側と労働側をあげての大争議となった昭和二五年の大谷重工争議についてくわしく記述しているのが特徴的です。

第五節・第六節―朝鮮戦争特需とジェーン台風― 第五節・第六節は、朝鮮戦争とジェーン台風という戦後復興後期の重要なエポックを取り上げます。

第五節「朝鮮戦争下の尼崎市」は、朝鮮戦争特需を機に進む鉄鋼各社の合理化と設備更新、民主化政策の後退、日本電気産業労働組合協議会（電産）傘下の日本発送電労組の闘争、左派に反対する民主化同盟（民同）派の台頭、労組の左派指導者に対するレッド・パージ、全労協の弱体化と労働運動の沈滞が描かれます。

第六節「ジェーン台風と防潮堤の完成」は、台風被害と救援対策、背景要因としての工場による地下水汲み上げ・地盤沈下を解説したのち、抜本的水害対策としての防潮堤建設計画の立案、財源負担をめぐる市と経済界の対抗、現職の六島誠之助を阪本勝が破った昭和二六年の市長選挙、阪本市政下における防潮堤完成と尼崎競走場（セクタープール）開設を叙述します。

第七節・第八節―戦後復興から高度経済成長へ― 第七節「朝鮮戦争後の不況と尼崎市財政の再建」は、朝鮮戦争特需後の不況を契機とする鉄鋼業界再編・大

企業への系列化、尼崎製鋼等の大規模労働争議、総評尼崎地方評議会発足、米軍駐留と反対運動、阪本市長の県知事転身と薄井一哉新市長による市財政再建、第二阪神国道（国道四三号）建設などを解説します。

第八節「高度経済成長下の尼崎市」は、昭和三〇年代初頭に始まる好況、新市庁舎竣工、複数市の合併を目指す阪神広域都市構想の検討、武庫川河川敷の集住バラック撤去、被差別部落の劣悪な環境、公害問題の発生、学校教員の勤務評定実施と教職員組合の反対闘争、労組を中心とする日米安全保障条約改定反対闘争、特飲街（非合法の売春街）問題などを記述しています。

高度経済成長への移行期のさまざまな変化や都市問題、都市課題を取りあげ、解説しているのが特徴です。

『戦後史』の評価 『戦後史』は、戦後復興から高度経済成長初期の重要なできごとや市民の関心事、具体的には闇市と商店街復興、市警察問題、朝鮮戦争特需と鉄鋼業を中心とする製造業の復興、ジェーン台風と防潮堤、六島誠之助・阪本勝両市長の功績、公害問題などがくわしく記述されています。また、戦後民主化の最大の特徴ともいえる、戦前期無産政党の流れを汲む革新政党や労働運動・争議の叙述に、多くの頁数が割かれています。時代を知り地域を知る筆者・師岡氏ならではの内容であり、この時代の市民の関心事・重要事項を知り得る基本文献と評価することができます。

その一方で、内容編成にあたって筆者自身の知見とともに新聞史料に依拠せざるを得ない部分があり、新聞記事となる事件やできごとを主要叙述対象として取りあげる傾向があることは否めません。そのことが、同時代人としての筆者の問題関心や目線と相まって、労働運動・争議や社会問題などが比較的小

わしく記述される一方で、事件性のない日常、たとえば市民生活や地域の地理的变化などは、必ずしも十分には描かれていません。こういった点と、先にふれた時代的制約に起因する分析的叙述の不十分性の克服が、本書以降の尼崎地域現代史研究にゆだねられた課題となりました。

なお『戦後史』刊行時に内容をめぐって紛糾し、刊行遅延問題が生じました。これについてはすでに市史第一―三巻掲載「尼崎市史編集事業経過」において総括的評価を行なっているので、こちらをご参照ください。

二、『戦後史』以降の尼崎現代史

『戦後史』刊行以降の尼崎地域現代史研究について、昭和四六年に創刊し、現在まで地域研究史料館が刊行を続ける『地域史研究』をはじめ、各種の文献に掲載された記録類及び研究論考に沿ってみていきます。

労働運動史 『戦後史』が重点的に記述した労働運動史の分野は、その後も証言の記録化をはじめとする調査研究が続けられ、多くの成果を生み出しました。

『地域史研究』掲載稿としては、戦後労働運動の中心である鉄鋼労組の組織状況や所属団体系統などを分析した第五巻第二号掲載の堂面秋芳論文があるほか、第一―三巻第一号掲載の山下栄二・福島玄「戦後尼崎における労働運動の再建」、第一―四巻第三号掲載の黒住健次・山本寅雄・牧達夫「総評尼崎地評の結成前後」、第一―五巻第一号掲載の平野正「尼鋼争議前後」が戦後初期労働運動の貴重な証言記録となっています。

兵庫県労働経済研究所発行の『労働研究』も、昭和五〇年代の各号に尼崎の労働運動の証言や史料を掲載

しており、その成果が『兵庫県労働運動史』戦後編に活かされました。とくに昭和二十年の日垂製鋼争議、二五年の大谷重工争議、二七〜三〇年の三次にわたる大同鋼板争議、二七年の総評尼崎地評結成、二九年の尼鋼争議について、同書は重点的に解説しています。全国的な注目を集めた尼鋼争議については、複数の研究書が取りあげ、さらに体験者による記録が刊行されるなど、記録と評価が蓄積されています³⁰⁾。

労働運動の周辺 『地域史研究』第二四巻第一号掲載の「映画と私」は、労働組合の文化活動である映画サークル運動の回想です。証言者の北村英治氏は、日本放送電の電産労組で活動し、レッド・パージにより職場を追われたのち、昭和二八年から三五年まで尼崎労働者映画協議会の事務局長を務めました。映画サークル運動に関する史料を残したほか、後掲の『甦る來竹桃』にも回想を寄せるなど、記録の作成や証言に積極的でした。そんな北村氏の証言に注目した研究者のひとりが、戦後日本を研究するデンバー大学歴史学部教授マイケル・H・ギブス氏でした。労働運動や平和運動と密接に結びつつ展開した映画文化に戦後日本社会の民主主義・平和主義をみるギブス氏は、北村氏をレッド・パージにより労働現場から追われ、他の分野に影響を広げた左派活動家の典型と評価し、著書のなかでかなりのウェイトを割いて、北村氏をはじめとする尼崎の映画サークル運動に言及しています。

ギブス氏も注目するレッド・パージについては、関係者一人の回想及び森下徹氏の解説論文を掲載した『回想・尼崎のレッド・パージ』⁵⁾があります。また、岩村登志夫氏執筆の『戦後商業者運動の展開』⁶⁾は、北村氏と同様にレッド・パージにより電産労組から転じ

た上村好夫・塩崎博両氏が設立した阪神商工共済会の年誌です。同会が労組や商工団体と連携して展開した、中小零細事業者利益擁護の活動を記録しています。

工業史・経済史 『地域史研究』第八巻第三号掲載の名和靖恭論文は、尼崎の製造業を代表する鉄鋼業が高度成長期前半に大企業の系列下に再編され、相対的地位を低下させていく過程を分析しています。第三四巻第一号掲載の佐藤益弘・小林清二両氏の回想は、同時期の尼崎の鉄鋼メーカーが有した高い技術力に関する技術者の立場からの貴重な証言です。一方、第二八巻第二号掲載の山口覚論文は、高度成長期に需要が急増する若年労働者確保のため、市が行なったさまざまな求職開拓政策を論じています。

『地域史研究』掲載以外では、尼崎を含む阪神工業地帯の高度経済成長前後を対象に、複数の研究者がそれぞれ視角から各分野を分析する二冊の論集、『阪神間産業構造の研究』と『阪神工業地帯』⁸⁾があります。また、尼崎都市・自治体問題研究所による『ベイエリアは誰のものか』⁹⁾は、工業地帯からの転換を迫られる尼崎臨海部の再生という視点から多角的かつ歴史的に論じており、このち二一世紀にかけて官民双方が取り組む南部再生事業の基礎文献となりました。

公害問題 都市化・工業化にともなう負の側面である公害の歴史については、主として公害反対運動の立場から記録化が行なわれました。

国道43号・阪神高速の公害については、43号線公害対策尼崎連合会代表として昭和四七年から七年間の座り込み闘争を闘った森島千代子氏の伝記『コスモスの甦る日まで』¹⁰⁾、裁判の弁護士・原告団による記録『いつの日か、花の道』¹¹⁾、尼崎都市・自治体問題研究所に

取りプロジェクトが、尼崎戦後史聞き取り研究会の取り組みです。阪神・淡路大震災後の被災史料保全活動をふまえて、歴史学会に属する研究者と市民が共同で近現代史に取り組むという趣旨のもと結成されたもので、『地域史研究』第二五巻第三号掲載の佐賀論文や森下論文をはじめ、多くの成果を産み出しました。工業史・経済史の項で第二八巻第二号掲載論文を紹介した山口覚氏もこの研究会メンバーのひとりであり、同論文のほか、尼崎市内の鹿児島・沖縄・高知出身者の同郷団体に取材した一連の研究を発表しています。

このほか、尼崎戦後史聞き取り研究会に参加・連携する横山澄男氏・卜部建氏¹⁸⁾らが、本書第Ⅲ部第五章第一節（入門編）に紹介した市民の戦争体験集に続き刊行した続編ともいふべき戦後体験集や、同じく研究会メンバーである井上眞理子氏による『市報あまがさき』への連載をはじめとする一連の著作なども、研究会から派生した貴重な成果といえます。史料館はこういったさまざまな聞き取り・体験・生活史掘り起こしプロジェクトとの連携・協力を重視し、後述する新「尼崎市史」事業と関連付けて、成果の共有をはかりました。

建築史・都市計画 これもまた、『戦後史』刊行後に成果が生まれた分野です。『地域史研究』第三五巻第一号及び第三六巻第二号掲載の船曳悦子論文は、文化会館と図書館という高度経済成長初期の尼崎を代表するふたつの公共建築を取りあげ、その設計の背後にあった建築運動を紹介しています。このふたつに続いて建設され、高度成長期の尼崎を象徴する公共施設といえるのが、現代日本を代表する建築家・村野藤吾の作品である現尼崎市庁舎です。第三六巻第一号掲載の笠原一人論文¹⁹⁾は、その建築的特徴を論じるとともに、

よる聞き取り記録集『静かに眠れる夜を』¹²⁾があります。大気汚染公害については、杭瀬団地の公害被害を訴える住民運動から始まった公害反対運動の記録、『はじまりは団地の「公害日記」から』¹³⁾、患者会の活動から公害訴訟に至る一連の関係者の証言と、運動団体側・行政側双方の関連史料を幅広く収録した『尼崎大気汚染公害事件史』¹⁴⁾、患者・被害者からの聞き取り記録集『赤とんぼが舞う青い空を』¹⁵⁾があります。

二一世紀に入って問題が顕在化したアスベスト被害については、神戸大学と京都精華大学の学生が被害者のライフヒストリーを取材し漫画により表現した『石の綿』¹⁶⁾等の注目すべき記録作品が生まれています。

生活史・体験・聞き取り 『戦後史』においても重視された前項までの分野とは対照的に、『戦後史』刊行後に豊富な成果を生んだのが、生活史や体験、ライフ・ヒストリーの聞き取りといった分野です。『地域史研究』掲載論文としては、戸ノ内地区の沖縄出身者コミュニティの歴史を描く第二四巻第三号掲載の宮城晴美論文、闇市であった出屋敷界限のフィールドワーク調査を報告する第二五巻第三号掲載の佐賀朝論文、戦後初期の学校と女性をめぐる地域の変化や課題を論じる第二五巻第三号掲載の森下徹論文、後掲の『図説尼崎の歴史』のための調査として実施した農業史聞き取りプロジェクトを報告する第二七巻第三号掲載古本由佳論文及び第三〇巻第一号掲載義根益美論文、平成一六年（二〇〇四）に明城小学校に統合された開明小学校に関する人々の記憶を建築の視点から分析する第三四巻第一号掲載の伊藤昭裕論文、戦後初期の地域新聞から地域の諸相を描く第三七巻第二号掲載の玉木雄三論文があります。

そこに込められた村野の設計思想を分析しています。船曳・笠原両氏とも、それぞれ『地域史研究』以外の刊行物に掲載した同テーマの論者があります²⁰⁾。

都市計画の分野では、事業を担当した元市職員による研究として、枝川初重氏が尼崎都市・自治体問題研究所所報『尼崎まちづくり研究ノート』²³⁾誌上に発表した土地区画整理事業に関する諸論文及び、荒木徹氏が市内で実施された複数の駅前再開発事業を事後評価しつつ論じた『まちが生まれ変わる時』²⁴⁾があります。加えて、寺町の景観行政について論じた山口覚論文²⁵⁾及び、築地の阪神・淡路大震災復興事業を評価した安藤元夫論文²⁶⁾が発表されています。

『尼崎地域史事典』 平成八年に刊行した『尼崎地域史事典』の掲載全項目数一、三四六のうち、現代の項目は九三項目でした。『戦後史』の記述内容に加えてその後の調査研究成果を踏まえ、戦後復興期から平成年代初頭頃までの主要な行政施策や公共施設、商工団体、交通機関、労働団体・争議、公害をはじめとするさまざまな社会問題、人名などを掲載しました。

三、『図説尼崎の歴史』

『尼崎地域史事典』刊行後の特徴的な動向としては、市内各地区における市民自身による歴史写真集編さん刊行の取り組み及び、新「尼崎市史」準備としての聞き取り調査プロジェクトがあります。いずれも本書第Ⅲ部第五章第一節（入門編）『尼崎市史』にみる尼崎の近代」の「三、『尼崎地域史事典』から新「尼崎市史」へ」において解説しており、後者については前項の「生活史・体験・聞き取り」でもふれているのでこ

この時期、史料館周辺で展開したもうひとつの聞き

れにゆずり、ここではこういった動向をふまえて平成一九年に刊行した、『図説尼崎の歴史』（以下「図説」と略す）現代編の内容的特徴を説明します。

初の本格的な尼崎地域現代史　本節「一、『尼崎の戦後史』でふれたように、『戦後史』は戦後復興期から高度経済成長初期の市民にとっての重要事項を記す基本文献と評価することができます。その一方で時代的制約から、研究の蓄積にもとづく分析的叙述や、事件性のない日常生活、地域の地理的变化などの記述は不十分でした。『図説』現代編はこういった『戦後史』の反省点を踏まえ、さらに前項に紹介した『戦後史』後の多様な地域史の成果をもとに、市が刊行する初の本格的尼崎地域現代史として刊行しました。

第一節―『戦後史』との違い―　おおむね昭和二〇年代を取り上げる第一節「戦後復興の時代」は、対象とする時代・内容が『戦後史』と共通しています。そんななか、とくに『戦後史』との違いが表れているのが、三つのコラムと節の最後の項目8「戦後復興期における地域の特徴と変化」です。

1コラム「三和に行ったらなんでも揃う」が描くのは、戦後初期の混乱と活気の特徴として人々の記憶に強く残る新三和の闇市です。『戦後史』は市内の闇市の存在を指摘するものの、実態については新聞記事を引いて簡単にふれるにとどまっていました。対してこのコラムは豊富な聞き取り調査をもとに、顔役・池田清一を中心に闇市がにぎわう様子を、筆者・井上眞理子氏による一頁大のイラスト復元マップとともに、生き生きと描いています。市民の回想も紹介され、『生活・文化史』をうたう『図説』ならではの項目といえます。六島誠之助と阪本勝を論じる5コラム「復興を担っ

たふたりの市長」は、聞き取り調査の成果をまじえてふたりの市長の功績と人物に迫っており、『戦後史』にはない人物史の項目といえます。尼鋼争議を描く7コラム「戦後尼崎の労働運動」もまた、『戦後史』後の研究蓄積に立つて争議の経過を詳述し、争議敗北と倒産に至る歴史的背景要因を分析・評価する内容となっています。

8「戦後復興期における地域の特徴と変化」は、行政区ごとの人口・産業構成を分析し、工場分布を視覚化しつつ各地区の地域特性を解説するほか、代表的な市場・商店街の成り立ちを紹介し、また、公の刊行物からは無視されがちな売春街の存在についても時代特有の事象として記述しています。

これら以外の項目も随所に体験やエピソードを盛り込み、写真を掲載することで、節全体がビジュアルで生き生きとした叙述となっています。この最後の点は、『図説』現代編全体に共通する特徴といえます。

第二節・第三節―まったく新たな叙述―　昭和三〇年代以降を描く第二節「高度経済成長期の尼崎」と第三節「石油危機から震災まで」は、対象とする時代が部分的に『戦後史』と重なるとはいえ、内容的にはほぼ完全に新たな叙述となっています。両節ともまず経済と行財政の流れを押さえたうえで、政治・市民生活・文化・人物及び時代のトピックである公害問題と阪神・淡路大震災を取りあげる項目構成をとっています。

経済を論じるのは第二節の三項目、1「産業構造の転換（一）」、2「産業構造の転換（二）」、7「ドル・ショックと石油危機」及び、第三節1「転換期を迎える尼崎の経済」です。いずれも統計分析により、基礎資材型偏重の製造業が高度成長期に量的拡大を遂げつつ相対

的地位を低下させ、高度成長後は停滞・後退へと向かうこと、商業も同様であり農業は一貫して縮小する状況を描きます。数値解説に加えて代表的工場・製品や石油危機当時のトイレット・ペーパー騒ぎなど、具体的エピソードを記録や証言により紹介しています。

都市政策・行財政を論じるのは、第二節3「市政の展開、都市基盤の整備」、4「教育・文化施策の展開」、第三節3「石油危機以降の都市行政」、4「開発と都市の変貌」です。経済成長・人口増大から都市活力の停滞・後退へとという変化のなか、市政の動向及び旺盛に展開された都市基盤整備や学校拡充などの施策を紹介しており、第二節3には公共施設年表を写真入りで掲載しています。

都市基盤の重要な構成要素である交通については、第二節3コラム「国道43号」が、横山澄男氏の研究成果をもとに、地域分断と道路公害発生 の要因となった43号建設の背後に道路用地確保を意図した戦時建物疎開があったことを論証しています。第三節4コラム「国道線・尼崎港線の廃止」は、市民に親しまれながら時代とともに消えた鉄道路線を紹介しています。

第三節2「尼崎における「保革」対立」は、革新市政が続いた尼崎の政治風土を分析して支持基盤の実態を論じており、同コラム「尼崎を二分した市長選挙」は、野草平十郎市長が当選した昭和五三年選挙の舞台裏を明らかにしています。

生活・文化・人物を描くのは四項目。第二節5「都市の変貌、市民生活の変化」は、人口増大にともなう市街地化と消費生活・住環境の変化を写真とグラフによりビジュアルに描きます。5コラム「出郷者の町」は、前項に紹介した山口覚氏の長年にわたる同郷団体

農業史聞き取り調査

生活・文化史を重視する新「尼崎市史」事業の一環として、地域研究史料館は研究者や市民ボランティア、市民団体などと連携しながら多くの聞き取り調査を進めました。そのうちもっとも大規模で組織的な調査プロジェクトとなったのが、農業史聞き取り調査でした。

当初は全市域を対象とする予定で、昭和二〇年代以来農業行政に携わった市役所OB・榎本利明氏を中心に、JA兵庫六甲の協力を得て調査対象者を募りました。しかしながら、早期に都市化した中央地区では農業従事経験者を見つけることができず、結局市内五地区六〇大字と隣接する伊丹市域二大字を対象に、平成八年（一九九六）から一三年にかけて計七五回、農家の方に加えて元農業団体職員や農機具販売業者の方、漁業関係者など計二六二人から聞き取りを行ないました。昭和二〇年代以前に農業に従事した世代からの聞き取りはむずかしく、主として三〇年代以降の農業について証言を得ることができました。



芋地区での聞き取り調査　平成13年8月

各回の調査結果は四人の調査員が分担して記録し、榎本氏と史料館職員の中村光夫が全体をとりまとめた報



昭和48年、森地区（岡本尚三氏提供写真）

告書『尼崎の農業を語る262』（二〇〇六）が、市農業委員会会長及び各地区農会長からなる刊行会から刊行されました。加えて史料館紀要『地域史研究』第二七巻第三

取材をもとに、尼崎地域における地方出身者「コミュニティ」を論じています。4コラム「萩原一青」は、失業対策労働のかたわら全国の城郭復元画を描いた画家の画業を紹介するもの。第三節3コラム「市民が創る文化」は、近松門左衛門に親しむ市と市民の取り組みと、市民による地域歴史写真集刊行事業を紹介しています。

公害問題を取りあげるのは、第二節6「深刻化する公害問題」、第三節5「公害」から「環境」へ」、同コラム「公害反対運動と公害裁判」です。多様な被害と対策をデータと写真により紹介し、市民が闘った公害反対運動及び公害裁判を歴史的に評価するほか、都市に残る自然を保護する先駆的取り組みとして猪名川自然林の保存を紹介しています。

現代編の最後は第三節6「阪神・淡路大震災がもたらしたもの」です。歴史的災害による市域の被災と復旧・復興を再現するほか、市民主体・官民協働の復興事例と評価される築地地区復興事業を紹介し、震災後の市民社会の変化と経済動向、市政の転換に論及して現代の叙述を終えています。

おわりに

以上、『戦後史』以来の尼崎地域現代史調査・研究、編さん・刊行の流れを解説してきました。残された課題への指摘として、高岡裕之氏は『図説』の書評において近代・現代に共通する課題として、広域的視点の欠如と、産業史・労働史・行政史といった旧態依然とした働く男性目線の内容編成を鋭く批判しています。生活・文化史をうたいながら、結局は日々の生活の視

といった貴重な成果が生まれました。その一方で、農会単位で聞き取りを行ない、対象の多くが男性であったことなど主として方法上の要因から、戦前戦後の農業の対比、農地改革、さらには女性労働に関する情報がないといった反省点も残りました。なお本調査の続編として、榎本利明著・発行『尼崎市の畜産について』（二〇〇九）が刊行されています。

点が欠けているのではないか、という指摘です。

前頁の「農業史聞き取り調査」の反省点からもわかるように、この課題の克服は決して容易ではありません。既存の枠組み・視点ではとらえきれない現代社会の多様性を、どうすれば歴史的に記録し、分析・評価し、後世に伝えていくことができるのか。本書を通じて、従来以上に多様な主体による、多様な視点に立った現代史研究が取り組まれ、本当の意味での市民の現代史が実現することに期待したいと思います。

〔注〕

- 『兵庫県労働運動史』戦後Ⅰ～Ⅳ（兵庫県、一九八三～一九九四）
- 労働争議調査会編著『鉄鋼争議』（戦後労働争議実態調査第七巻、中央公論社、一九五八）、塩田庄兵衛ほか編『戦後日本の労働争議』（お茶の水書房、一九七七）、鈴木栄一『尼鋼の職場闘争』（本音文庫第四巻、本音を語る会、一九八六）、山本正之著・発行『尼鋼争議 闘いの記録と争議に見る人間像』（一九九三）、尼鋼会尼鋼争議編集委員会編著『尼鋼争議 戦後労働運動の先駆』（アットワークス、二〇〇七）
- 尼崎市立地域研究史料館所蔵「北村英治氏資料」
- MICHAEL H. GIBBS "Film and Political Culture in Postwar Japan" (FRAMING FILM / The History and Art of Cinema.15, Peter Lang Publishing, Inc. 2012)
- 尼崎レッド・パージ問題懇談会編『回想「尼崎のレッド・パージ」』（耕文社、二〇〇一）
- 岩村登志夫『戦後商業者運動の展開―阪神商工共済会の二十五年』（阪神商工共済会、一九八〇）
- 増谷裕久編『阪神間産業構造の研究―尼崎地域産

（執筆者）地域研究史料館（担当）辻川敦「農業史聞き取り調査」以外のすべて／中村光夫「農業史聞き取り調査」

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』掲載尼崎関係現代史論文・史料等一覧

（論文）

尼崎地方戦後労働運動のひとつの位置づけ―労働組合統計を中心に― 堂面秋芳 第五巻第二号
 高度成長第一期における尼崎市域鉄鋼業の「再編」過程 名和靖恭 第八巻第三号
 戸ノ内の一角で―沖縄の出稼ぎの歴史と浜西の住人たち― 宮城晴美 第二四巻第三号
 尼崎ヤミ市フィールドワーク参加記―「尼崎戦後史聞き取り研究会（仮称）」の活動紹介を兼ねて― 佐賀朝 第二五巻第三号
 初期尼崎母親大会と地域社会―母・女教師・こども― 森下徹 第二五巻第三号
 武庫地区における農業史聞き取り調査 古本由佳 第二七巻第三号
 工都尼崎市の求職開拓政策 山口寛 第二八巻第二号
 園田島之内地区における農業史聞き取り調査 義根益美 第三〇巻第一号
 記憶される学校の空間要素とその特性―尼崎市立開明小学校を事例として― 伊藤昭裕 第三四巻第一号

業の歴史と現状』（関西学院大学産研叢書11、法律文化社、一九八七）
 (8) 河野通博・加藤邦興編著『阪神工業地帯―過去・現在・未来―』（法律文化社、一九八八）
 (9) 尼崎都市・自治体問題研究所編『バイエリアは誰のものか―尼崎臨海地域の歴史的役割と課題―』（自治体研究社、一九九四）
 (10) 麻生節子『コスモスの甦る日まで』（夏の書房、一九八一）

- 43号線道路裁判并護国・原告告団『いつの日か、花の道 国道43号線道路裁判と運動の記録』（アクスパブリケーション、二〇〇二）
- 尼崎都市・自治体問題研究所公害と環境部会編『静かに眠れる夜を 尼崎四三号線道路公害闘争の記録』（尼崎都市・自治体問題研究所、一九九九）
- 加藤恒雄『はじまりは団地の「公害日記」から』（ウインかもがわ、二〇〇五）
- 平野孝・加川充浩編『尼崎大気汚染公害事件史』（尼崎公害患者・家族の会、尼崎大気汚染公害訴訟并護団、二〇〇五）
- 杉本久末子『赤とんぼが舞う青い空を 尼崎公害をたたかう人びと』（ブレッジプレス、二〇二三）
- 神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクト・京都精華大学機能マンガ研究プロジェクト制作『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』（かもがわ出版、二〇一二）、『マンガで読む震災とアスベスト』（神戸大学倫理創成プロジェクト、二〇一四）
- あまがさき未来協会編『ネオ・フオークローア入門あまがさき発「街かど学」のすすめ』（神戸新聞総合出版センター、一九九六）

校長職の成立と学校経営史（一～三）―尼崎市戦前教育史余話― 末方鐵郎・池田洋 第三四巻第二号・第三七巻第一号・第三八巻第一号
 尼崎市文化会館の設計過程にみる戦後初期の尼崎市と新日本建築家集団大阪支部の活動 船曳悦子 第三五巻第一号
 村野藤吾の尼崎市庁舎―その公共の形― 笠原一人 第三六巻第一号

尼崎市立図書館の設計案作成過程にみる戦後初期の尼崎市と新日本建築家集団大阪支部の活動 船曳悦子 第三六巻第二号
 『阪神日日新聞』に見る占領期の阪神間 玉木雄三 第三七巻第二号
 騒音公害関係文書の目録化作業を通して―「尼崎市騒音防止条例」制定前後― 石原佳子 第一一〇号
 御園小学校の先進的取り組み―昭和三〇年代の挑戦― 玉木雄三 第一一二号

「財」尼崎市婦人共励会文書」について 宮城洋一郎 第一一二号
 白髪一雄と尼崎 妹尾綾 第一一四号
 「尼崎市立開明小学校」の廃校から「尼崎市役所開明庁舎」へ 山本敏史 第一一四号
 四三号線公害対策尼崎連合会座り込み日誌の翻刻作業について 久保在久 第一一五号

（史料）

もずの庭 桜井利枝 第一二巻第三号
 八木林作市長の戦後処理施政方針演説 地域研究史料館 第一三巻第三号
 米軍の尼崎市民運動場接收問題

- 山口寛『出郷者たちの都市空間 パーソナル・ネットワークと同郷者集団』（関西学院大学研究叢書第一二三編、ミネルヴァ書房、二〇〇八）のほか、人文地理学会・地理科学学会・関西学院大学人文学会の各研究誌等掲載論文がある。本章第三節（実践編）2、「同郷者集団の調査」参照。
- 本書第Ⅲ部第五章第一節注（4）参照
- 『甦る夾竹桃―尼崎市民のつづる戦後体験』（尼崎市民の戦後体験編集委員会、一九九七）
- 本書第Ⅲ部第五章第一節注（11）参照
- 船曳悦子「戦後初期尼崎における公共建築」（辻川敦・大国正美編著『神戸―尼崎 海辺の歴史』―神戸新聞総合出版センターのじぎく文庫、二〇二二―所収）、笠原一人「兵庫の戦後モダンリズム建築（5）尼崎市庁舎」神戸史学会『歴史と神戸』第四八巻第一号、二〇〇九・二
- 『尼崎まちづくり研究ノート No.1～4（尼崎都市・自治体問題研究所、一九九九・二～二〇三・二）
- 荒木徹『まちが生まれ変わる時 駅前再開発の実態』（文芸社、二〇〇五）
- 山口寛「都市のダイナミズムと都市景観行政―尼崎市の寺町都市美形成地域を中心に―」（関西学院大学人文学会『人文論究』第六三巻第一号、二〇二三・五）
- 安藤元夫「尼崎市築地地区における復興区画整理・住宅地区改良合併施行事業の評価」（同著『復興都市計画事業・まちづくり 阪神・淡路大震災』―学芸出版社、二〇〇四―所収）
- 高岡裕之『図説尼崎の歴史』（下）近代編・現代編』（『地域史研究』第三七巻第二号、二〇〇八・三）

（18）山口寛『出郷者たちの都市空間 パーソナル・ネットワークと同郷者集団』（関西学院大学研究叢書第一二三編、ミネルヴァ書房、二〇〇八）のほか、人文地理学会・地理科学学会・関西学院大学人文学会の各研究誌等掲載論文がある。本章第三節（実践編）2、「同郷者集団の調査」参照。

（19）本書第Ⅲ部第五章第一節注（4）参照

（20）『甦る夾竹桃―尼崎市民のつづる戦後体験』（尼崎市民の戦後体験編集委員会、一九九七）

（21）本書第Ⅲ部第五章第一節注（11）参照

（22）船曳悦子「戦後初期尼崎における公共建築」（辻川敦・大国正美編著『神戸―尼崎 海辺の歴史』―神戸新聞総合出版センターのじぎく文庫、二〇二二―所収）、笠原一人「兵庫の戦後モダンリズム建築（5）尼崎市庁舎」神戸史学会『歴史と神戸』第四八巻第一号、二〇〇九・二

（23）『尼崎まちづくり研究ノート No.1～4（尼崎都市・自治体問題研究所、一九九九・二～二〇三・二）

（24）荒木徹『まちが生まれ変わる時 駅前再開発の実態』（文芸社、二〇〇五）

（25）山口寛「都市のダイナミズムと都市景観行政―尼崎市の寺町都市美形成地域を中心に―」（関西学院大学人文学会『人文論究』第六三巻第一号、二〇二三・五）

（26）安藤元夫「尼崎市築地地区における復興区画整理・住宅地区改良合併施行事業の評価」（同著『復興都市計画事業・まちづくり 阪神・淡路大震災』―学芸出版社、二〇〇四―所収）

（27）高岡裕之『図説尼崎の歴史』（下）近代編・現代編』（『地域史研究』第三七巻第二号、二〇〇八・三）

地域研究史料館 第一四巻第一・二号
 ジェーン台風直後の緊急臨時市議会 地域研究史料館 第一四巻第三号
 一九五三年の尼崎市の下請工場実態調査 地域研究史料館 第一五巻第三号
 尼中生の戦中戦後日記 戦後の部 岡本忍 第一六巻第一・二号
 昭和三〇年代の尼崎の映画館・劇場一覧 地域研究史料館 第一八巻第三号
 幻の尼崎映画ストーリー 鈴木政男作 鋼鉄の虹 地域研究史料館 第二六巻第一号
 ミレニアムイベント 昔と今の尼崎写真展 地域研究史料館 第三〇巻第二号
 小川弘幸氏撮影写真アルバム 井上衛・小川弘幸 第一二三号

（回想）

戦後尼崎における労働運動の再建 山下栄二・福島玄 第一三巻第一号
 総評尼崎地評の結成前後 黒住健次・山本寅雄・牧達夫 第一四巻第三号
 尼鋼争議前後 平野正 第一五巻第一号
 映画と私―尼崎における労働者映画運動の回想― 北村英治・上倉庸敬・吉岡敏夫 第二四巻第一号
 奄美連盟尼崎支部結成の経緯と動向 孝野武志・佐竹京子 第二八巻第一号
 高度成長期の尼崎製鋼所 佐藤益弘・小林清二 第三四巻第一号